

研究論文

七條めぐみ 愛知県立芸術大学音楽学部器楽専攻（ピアノコース）

フローベルガーの組曲の書法

——フランスの鍵盤組曲との関係

## 要旨

ヨハン・ヤーコプ・フローベルガー Johann Jacob Froberger (1616-1667) はドイツのシュトゥットガルトに生まれ、ウィーンの宮廷オルガニストの職に就いていながら、ローマやオランダ、パリなど、ヨーロッパ各地を旅行して過ごした作曲家である。彼はもっぱら鍵盤楽器のための作品を残しており、とりわけ組曲の歴史においては重要な人物として見なされてきた。しかしそれは、彼が組曲の古典的配列の創始者であるという 17 世紀以来の誤認に基づくもので、実際には彼は別の配列によって組曲を書いていた。一方で、フローベルガーは組曲においてフランスの様式をドイツへ取り入れたとも言われている。その内容について、リュート特有の語法をチェンバロへ移したことや、リュート固有の楽曲形式である‘トンボー（墓碑曲）’を組曲へ取り入れたことが指摘されているが、組曲を構成する舞曲の書法について、確固としたことが述べられることは少ない。従って本論文では、フローベルガーが取り入れたフランス様式に焦点を当て、その詳細を明らかにした。

彼は幼少の頃より、フランスのリュート奏者の演奏に親しんでいたと言われているが、同時代の鍵盤作品に触れたのは、1649 年が初めてのことだった。その後、1652 年にはパリを訪れ、ジャック・シャンピオン・ド・シャンボニエール Jacques Champion de Chambonnières (1601/02-1672) やルイ・クープラン Louis Couperin (1626-1661) といったクラヴサンの作曲家や、ドゥニ・ゴティエ Denis Gaultier (1603-1672) やブランロシェ Blancrocher (? -1655) といったリュート奏者と交流を深めている。フローベルガーはとりわけブランロシェと親密だったが、彼はリュートを全く演奏しなかったし、作品も残していない。このことから、彼の組曲とフランス様式の関係について考察する際には、フランスの鍵盤組曲を対象とすることが有益である。よって本論文では、フローベルガーとシャンボニエール、ルイ・クープランの組曲をそれぞれ分析し、フローベルガーがこの二人から受けた影響について考察した。

全体は 4 章から成り、第 1 章でフローベルガーの生涯と作品について概観し、第 2 章ではシャンボニエールとルイ・クープランの組曲を分析した。第 3 章ではフローベルガーの自筆譜に含まれる組曲を分析し、第 2 章で導き出されたことと比較した。第 4 章ではフローベルガーが組曲において、フランス

の鍵盤組曲のリズム書法と2段譜表による記譜法を取り入れているという結論に達した。

シャンボニエールやルイ・クープランの組曲では、17世紀のフランスに特徴的な、リュートからクラヴサンへの語法の移し替えが顕著である。それぞれの舞曲は原型となった舞踊のリズムが強調される部分と、対位法技法を用いたポリフォニックな部分が交代している中に、リュートに由来するスティル・ブリゼや装飾的な音型が散りばめられている。

一方、フローベルガーの組曲では、スティル・ブリゼや付点のリズムなどがフランスの鍵盤組曲と共通するものの、全体の書法ははるかにポリフォニックであり、舞曲らしい拍節感に乏しい。そこで筆者は、両者の組曲におけるテクスチャの違いの要因は、フローベルガーが用いている記譜法にあると考えた。

フローベルガーの組曲では、中世以来多声声楽曲で使われていたメンスーラとプロポルツィオの理論に基づく記号が、拍子記号として使用されている。そのために拍子記号は、現代のように、基準となる音価とそれが1小節内に含まれている数を表すのではなく、大きな音価がどのように分割され、楽曲全体がどのリズムを基本としているかを表している。彼がこのような古い記号を用いたのは、そうした記譜法により親しんでいたからである。ドイツにおいては組曲で用いられるような2段譜表の導入は遅く、声部別の4段譜表からなるパルティトゥーラの方に遥かになじみがあった。ここでは、拍子記号にメンスーラ記号が使用されていただけでなく、音符の記譜にまでも、多声声楽曲で使われていた白符計量記譜法が用いられることがあった。

こうした記譜に慣れていたフローベルガーにとっては、組曲に2段譜表を用いるということそのものが、フランス様式を取り入れることだったと考えられる。拍子記号はフランスの組曲とは異なるものの、彼の2冊の自筆譜においては、1冊目に含まれる組曲から2冊目に含まれる組曲にかけて、ポリフォニックな書法から舞曲のリズムを取り入れた書法への変化が認められる。その意味でも彼の組曲は、ドイツの鍵盤組曲が、フランスの鍵盤組曲の書法を取り入れながら徐々に様式化されていく初期の段階を表していると言えることができる。